

旭日、遥かなり7

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

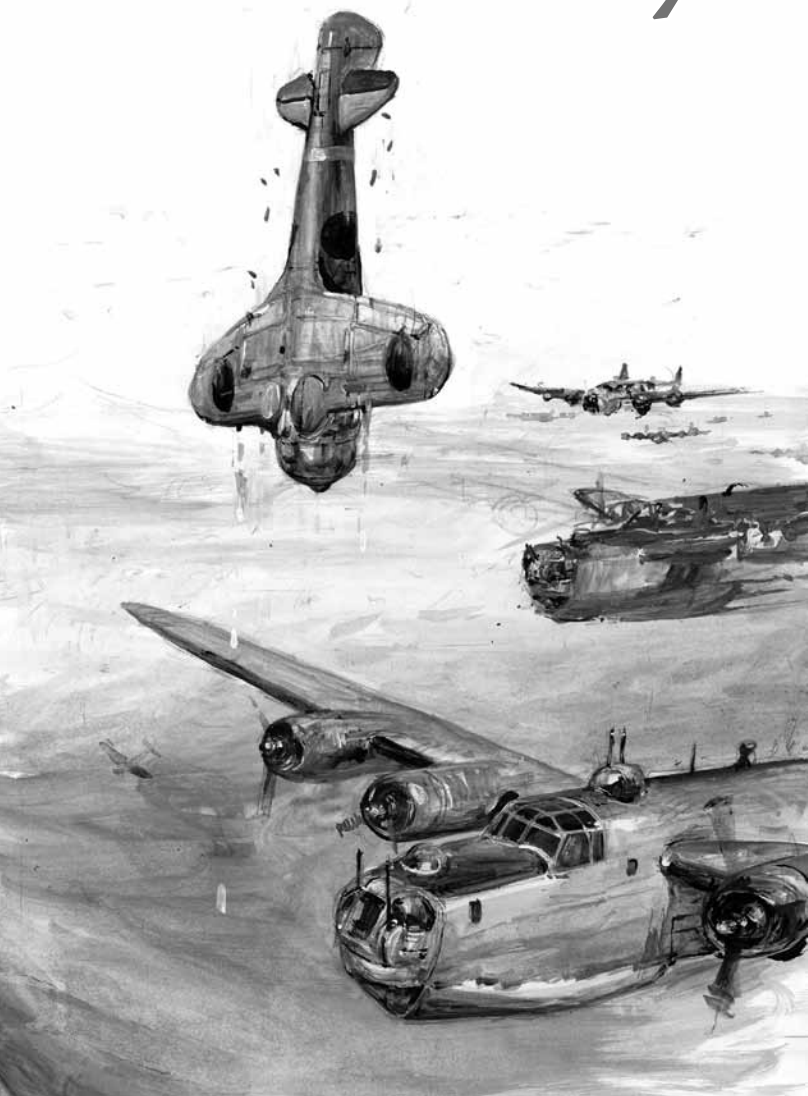
第一章	中部太平洋の堅陣	9
第二章	混沌の大陸	31
第三章	「野火」再び	65
第四章	逆襲の英国戦艦	101
第五章	「トラック」ハ屈セズ	143
第六章	追うもの、追われるもの	235



ユーラシア大陸周辺図



旭日、遥かなり 7



第一章

中部太平洋の堅陣^{けんじん}

1

その艦は、これまでに帝国海軍が配備してきたどの航空母艦とも異なっていた。

煙突は艦橋上部に突き出し、艦の外側に傾斜している。商船改装空母の飛鷹型と同様の構造だ。

艦体も、従来の空母とは大きく異なる。

飛行甲板と艦首が一体化しており、あたかも鉄塊から削り出したように見える。

エンクローズド・バウと呼ばれる型式だ。

新鋭空母「大鳳」。

川崎重工艦船工場で建造され、今年——昭和一九年三月七日に竣工した艦が、横須賀軍港にその堂々たる姿を浮かべていた。

（頼もしい外観だな）

連合艦隊首席参謀藤泰造大佐は、飛行甲板上をゆっくりと歩きながら、そんな感想を抱いた。

竣工したばかりであるためか、塗料やピッチの匂いが漂っている。

木の香りはない。

板張りの甲板を持つ多くの艦と異なり、「大鳳」の飛行甲板は、鋼鋳が剥き出しとなっているのだ。

「いかにも頑丈そうだな」

藤や航空参謀樋端久利雄中佐と共に視察に訪れた連合艦隊参謀長吉良俊一少将が、飛行甲板を踏みしめたり、方々に目を配ったりしながら、感心したように言った。

「事実、頑丈な艦です」

艦政本部総務部第一課員の奈倉巧中佐が言った。

「飛行甲板には、二〇ミリ厚の鋼鋳と七五ミリ厚のDS鋼鋳を重ね張りしました。五〇〇キロ爆弾程度なら、はじめ飛ばせるだけの強度を持っています。

水中防御も在来の空母より優れており、魚雷一、二本程度の命中なら、速度低下もほとんどないように設計されています。防御の堅さでは、帝国海軍の空

母中随一ずいいちでしょう。いや、世界一かもしれません」

「第三次ギルバート沖海戦の旗艦きかんがこの艦だったら、小沢長官おさわも生還されたことだろう」

いかにも口惜くちしい、と言いたげな言葉が、吉良の口から漏れた。

帝国海軍の空母でも最大の巨軀きよくを誇った「加賀」の沈没と、帝国海軍随一の知将を謳うたわれた小沢治三郎大將さぶろう（戦死後進級）の戦死がもたらした衝撃は、まだ記憶に新しかった。

「このサイズの艦にしては、搭載機が少ないようですよ」

藤が、問題点を指摘した。

「本艦の基準排水量は二万九三〇〇トン。『翔鶴』しょうかく『瑞鶴』ずいかくを四〇〇〇トン近く上回ります。にも関わらず、搭載機は常用五二機、補用一機と、翔鶴型より二〇機も少なくなっています。防御力はともかく、攻撃力の点ではやや劣ると言わざるを得ません」

「それは、防御力の強化と引き替えだ。飛行甲板に

装甲を施せば、トップヘビーになることは避けられないため、船体の甲板を一層減らして、重心の上昇を抑えたんだ。その代償として、艦内設備の一部を艦首と艦尾に移動せざるを得ず、格納甲板を縮小しなければならなかった」

艦政本部総務部長の甘利重太郎少将が言った。

「『大鳳』自体の搭載機数は少なめだが、弾薬庫と燃料庫を大きめに取っている。他の空母が被弾し、発着艦不能に陥おちいつても、本艦で搭載機を引き受け、燃料、弾薬を補給して、再出撃させることが可能だ。海空戦の渦中かちゅうにあつても、最後まで戦い抜くことを前提に造られている」

「魚雷や爆弾を何発ぶち込まれても、最後まで空母の機能を失うことなく、戦場に留まり続けられる空母ですか。機動部隊の理想を実現したような艦ですね」

樋端うなずが感心したように言い、吉良も満足そうに頷いた。

「山本長官にも、早くお目にかきたいものだ」

この日の視察は、山本と吉良以下の幕僚三名で行うことが予定されていたが、山本は海軍大臣との打ち合わせが入ったため、視察は参謀長以下の三名のみとなったのだ。

藤は、「大鳳」と並んで停泊^{ていはく}しているもう一隻の空母に視線を投げた。

艦の大きさと形状は、中型空母の「蒼龍^{そうりゅう}」に似ているが、細部は異なっている。

艦橋はやや大きく、トップには二一^{でんたん}号電探のアンテナが、右舷側^{うげん}には一三号電探のアンテナが、それぞれ装備されている。

「蒼龍」を簡素^{かんそ}にした艦形ながら、「蒼龍」の竣工時にはなかった装備が、随所に見られる。

新造空母「雲龍^{うんりゅう}」。

戦時急造空母の一番艦として、横須賀海軍工廠で建造され、「大鳳」より三日遅れで竣工した艦が、「大鳳」と舳先^{へさき}を並べていた。

搭載機数は常用五七機、補用八機。「蒼龍」「飛龍^{りゅう}」とほぼ同等だ。

昇降機^{しやうこうき}が一基少なく、艦上機の発進準備にやや時間がかかるが、電探や通信機器では「蒼龍」「飛龍」より勝る。

「大鳳」のような重防御空母ではないが、機動部隊の一艦として、十分な性能を持つ。

これら以外にも、改祥鳳^{かいしやうほう}型とでも呼ぶべき小型空母二隻が、四月末までに二隻竣工する。

「戦闘機空母」あるいは「直衛空母^{ちよくゑい}」とも呼ばれる、艦隊の直衛に特化した艦だ。搭載機は、艦戦^{かんせん}と対潜^{たいせん}哨戒^{しやうかい}用の旧式艦爆^{かんぱく}のみで固めている。

既存の艦と合わせれば、正規空母と小型空母を合わせて、一五隻が揃う。

「雲龍型の二番艦以降は、どうなっていますか？」
「二番艦は三菱長崎造船所で、三番艦は呉^{くれ}工廠で、それぞれ建造中です。二番艦は六月に、三番艦は七月に、それぞれ竣工する予定です」

樋端の問いに、奈倉が答えた。

「戦時急造型と言っても、なかなか短期間ではできぬものだな」

吉良が、苦い表情を浮かべた。

参謀長が言いたいことは、藤にも想像がつく。

米国は、新鋭空母のエセックス級、インデペンデンス級を次々と竣工させ、前線部隊に配備している。エセックス級は、帝国海軍の翔鶴型を上回る性能を持ち、インデペンデンス級も小型空母ながら、日本海軍の飛鷹型に匹敵する能力を持っている。

一方日本は、翔鶴型よりも小振りな戦時急造型空母の建造すら思うに任せない。

彼我の造船能力の差を見ると、溜息をつかずにはいられないのだろう。

『大鳳』と『雲龍』が間に合っただけでも、よしと考えましょう。手持ちの戦力で勝つ手立てを考えるのが、私たちの仕事です」

「そうだな」

藤の言葉に、吉良が頷いた。

「中小型艦も含めてとはいえ、我が軍は一五隻の空母を使用できる。機動部隊の規模は、開戦時の倍以上に膨れ上がったんだ。これだけの戦力を委ねられて文句を言ったら、罰が当たる」

「GFの参謀としてだけではなく、江田島の同期生としても感謝する。米軍の来寇前に、空母の数を揃えてくれたことに」

藤は、江田島同期生の口調に戻って奈倉の手を握った。

正規空母と小型空母、合計一五隻の空母をどのように編制し、運用するかについて、藤は早くも考えを巡らせ始めていた。

2

「目標まで八〇哩」

第二六爆撃機中隊を率いるビル・ローリー大尉の

耳に、航法を担当するジョセフ・キッチナー中尉の
声が届いた。

26BSは、アメリカ合衆国第七航空軍第一一爆撃
飛行隊に属している。

マーシャル、ギルバート方面の航空作戦を担当し
ていた第二〇航空軍は、機種改変のため本国に戻り、
7AFと第一五航空軍が交替したのだ。

7AF、15AF共に、長く日本軍がマーシャル方
面の中心地としてきたクエゼリン環礁に展開して
おり、合衆国が誇る四発重爆撃機コンソリデーテッ
ドB24「リベレーター」を装備している。

クエゼリン進出以来、7AFは15AFと交替で、
トラック環礁への長距離爆撃を敢行し、飛行場や防
御陣地、在泊艦船を叩いて来た。

日本軍の抵抗は激しく、7AFも15AFも多数の
機体とクルーを失ったが、合衆国の重爆部隊もまた
一歩も退くことなく、トラックへの攻撃を反復した。

この日——一九四四年四月八日の作戦では、11B

GのB24四六機の他、第一四爆撃飛行隊隷下のB24
四三機が出撃し、一路トラックを目標にしていた。

『ローズ1』より全機へ。高度二万七〇〇〇フィ
ート（約八二〇〇メートル）

爆撃隊の総指揮を執る11BGの飛行隊長ジェーム
ス・マクブライト中佐の声が、レシーバーに響いた。
『リリー1』より『リリー』全機へ。二万七〇〇
〇フィートまで上昇する

ローリーは麾下全機に下令し、上昇に転じた。

B24が太い機首を上に向け、緩やかな角度で高度
を上げ始める。

「中隊全機、異常なし」

尾部銃座を守るリック・オーティス軍曹が、イン
カムを通じて報告する。

14BGの四三機も、順次上昇に移っている。

二万フィート（約六〇〇メートル）の高度を飛
行していたB24の編隊は、一〇分余りの時間をかけ
て、二万七〇〇〇フィートまで上昇する。

「目標まで四〇哩」

「そろそろ出迎えが来ますな」

キッチナーの報告を受け、副操縦士を務めるフランス・パイル曹長が言った。

日本軍の戦闘機は、トラックの手前三、四〇哩の空域まで前進してB 24を迎え撃つのが常だ。

マーシャルを占領した合衆国軍が、いち早くメジエロ、クエゼリンにレーダーを設置し、防空態勢を整えたように、日本軍もまたトラックにレーダーを設置し、空襲の早期探知に努めている。

『『リリー』より『リリー』全機へ。敵機の出現に備えよ』

ローリーが麾下全機に指示を送ったとき、
『『ローズ』より全機へ。左下方に敵機』

マクブライトの声がレシーバーに響いた。

「おいでなすったか！」

ローリーは腰を浮かせ、左下方を見やった。
薄絹うすぎぬのような雲の間に、一群の機影きえいが見える。

B 24の飛行高度まで上昇しようとしているようだ。
「機体間隔を詰めよ。敵機が射程内に入り次第、射撃開始」

マクブライトの指示を受け、各中隊が機体を密集させ始めた。

ローリー機の左右から、26BSの僚機りょうきが接近して来る。各機のクルーは既に機銃座に取り付き、敵機の攻撃に備えている。

「敵機は零戦ジック！」

機首の爆撃手席に陣取るスタン・ブレットナー曹長が、敵機の機種を見抜いて報告する。

開戦以来、一貫して日本海軍の主力艦戦となつて
いる戦闘機が、迎撃げいげきに上がって来たのだ。

合衆国は、グラマンF 6F、ヘルキャットヘルキャットを初めてとする新型戦闘機を前線に配備しており、ジークも以前ほどの脅威きょういではなくなっているが、B 24の長距離爆撃には航続距離の関係上、戦闘機の護衛ごゑいが付かない。

B 24のクルーは自らの力で、太平洋を席卷した強力な戦闘機から自身を守らねばならない。

26 B Sの左前方に位置する第二三爆撃機中隊がいち早く発砲する。

胴体の左側面に発射炎が閃き、何条もの火箭が噴き延びる。

B 24に肉迫しようとしていたジークが機体を翻して離脱する。

二機目、三機目がB 24への接近を試みるが、結果は同じだ。

機首や尾部、あるいは胴体側面から放たれる一二・七ミリ弾の火箭に射すくめられ、射程内に近寄ることすらできない。

旋回機銃座の射撃は命中率が悪く、火箭がジークを貫くことはないが、ジークの二〇ミリ弾がB 24を襲うこともない。

機体を密集させ、緊密な編隊を組んだB 24の弾幕射撃が、ジークを追い払っている。

「よし、いいぞ!」

ローリーは快哉を叫んだ。

零戦も含めた日本軍の戦闘機は、全般に高高度での飛行を苦手としており、高度二万フィートを越えると、速力、運動性能が著しく低下する。

開戦以来、多数の合衆国軍用機を撃墜して来たジークも、二万七〇〇〇フィートの高度では、得意の旋回性能を発揮できないのだ。

「餌はねえぞ、野良犬!」

副操縦士席のパイルも、笑いながらジークに罵声を浴びせる。

B 24に肉迫できず、一二・七ミリ機関砲の射撃に阻まれるジークの姿から、餌を求めて近寄ってきた野良犬が追い払われる様を想像したようだ。

『「ローズ」より全機へ。目標視認』

マクブライトの声がレシーバーに響いた。

最初は複数の点が寄り集まったようにしか見えなかったが、接近するにつれて島の形が整い、島々を

囲む環礁もはつきりして来る。

トラック環礁。

昨年八月にマーシャルを放棄した日本軍が、新たな前線基地に定めた中部太平洋の要衝だ。

米日開戦の前から「太平洋のジブラルタル」と呼ばれていた重要拠点であり、現在は環礁内に九箇所の飛行場を持つ、巨大な航空要塞となっている。

この日の目標はモエン島。

日本が「春 島」の独自呼称を与えた島にある、二箇所の飛行場だ。

マクブライト機が右に旋回し、トラックに機首を向ける。マクブライトが直率する第二爆撃機中隊のB 24二三機もマクブライト機に倣い、次々と右に機首を振る。

『リリー』より『リリー』全機へ。我に続け

ローリーは麾下のB 24に下令し、26BSを誘導する。

島々を囲む褐色の環礁が、次第に近づいて来る。

環礁の内側に突入すれば、モエン島までは指呼の間だ。

「リリー」全機、投弾用意——との言葉が口から出なかったとき、

「敵機、直上！」

誰かの叫び声が、通信波に乗って隊内を駆け巡った。

ローリーが咄嗟に顔を上向けたとき、編隊の前上方に複数の黒い影が見えた。

敵機の影が下方へと抜けた直後、B 24二機が相次いで火を噴いた。

一機は左主翼の二番エンジンから、もう一機は右主翼の三番エンジンから、それぞれ炎と黒煙を噴き出し、高度を落としている。

「敵機、こちらにも来ます！」

「リリー」全機、射撃開始！」

パイルの叫びを受け、ローリーは26BS全機に命じた。

機首に発射炎が閃き、二条の火箭が突き上がる。

コクピットの後方からも、連射音が届く。

機首と胴体上面に装備された、合計四門の一二・

七ミリ機関砲が、敵機に射弾を浴びせているのだ。

ローリー機だけではない。26BSのB24各機が次々と対空戦闘を開始する。

機首と胴体上面の二箇所から、合計四門の一二・

七ミリ機関砲を頭上に向けて発射し、青白い無数の曳痕を、急降下して来る敵機に叩き付ける。

コクピットの右脇を真っ赤な曳痕が通過し、ハンマーで一撃されたような衝撃と打撃音が、頭上に響いた。全長二〇・五メートル、全幅三三・五メートルの巨体が、大きく揺らいだような気がした。

黒い機影が、B24の機体をかすめるようにして下に抜ける。機首が、異様なまでに太い機体だ。一見、砲弾を逆向きにしたように見える。

「四番機、六番機被弾！ 火災発生！」

オーティスが、インカムを通じて報告する。

「鍾馗の槌打ち攻撃か……！」

パイルが呻いた。

合衆国が「トージョー」のコード名で呼ぶ機体は、

日本陸軍が一昨年、制式採用した戦闘機だ。

旋回格闘戦に強い零戦、隼と異なり、速度性能

と上昇性能を重視した機体で、一撃離脱戦法に適している。

陸軍機であるため、太平洋の島嶼戦では使用され

ず、もっぱらビルマでイギリス軍を相手取っていたが、昨年末よりトラック環礁に配備された。

重爆相手には、高高度で待ち構え、垂直に近い角度で急降下しながら一撃を浴びせる直上攻撃を多用して来る。

機首の太いトージョーが真上から突っ込んで来る様が、振り下ろされるハンマーを思わせるところから、「槌打ち攻撃」の異名が付けられた。

遥かな高みから叩き付けられるハンマーの一撃が、

四機のB24を11BGから奪い去ったのだ。

新たなトージョーが、26BSの真上から降つて来る。

残存する二〇機が、機首と胴体上面の一二・七ミリ機関砲に目一杯仰角をかけ、無数の射弾をトージョーに浴びせる。

正面から一二・七ミリ弾を喰らったトージョーが、プロペラを吹き飛ばされ、エンジン・カウリングを引き裂かれて、炎を引きずりながら墜落する。

コクピットに被弾したトージョーが、風防ガラスの破片を撒き散らし、よろめきながら姿を消す。

健在なトージョーは、ひるんだ様子を見せない。

特有の太い機首を真下にし、雨霰と浴びせられる

一二・七ミリ弾を弾き飛ばさんばかりの勢いで、真一文字に突っ込んで来る。

トージョーの両翼に発射炎が閃き、B24の頭上から、真つ赤な曳痕が降り注ぐ。

一連射を放ったトージョーは、速力を緩めることなく、フル・スロットルの爆音を轟かせながら、B

24群の真下に抜ける。

機首や胴体上面の一二・七ミリ機関砲が振り回され、射弾が放たれるが、トージョーが捉えられないことはない。敵機はB24の下方に飛び抜け、機影は芥子粒のように小さくなる。

「九番機被弾！ 落伍します！」

新たな報告が、インカムを通じて上げられた。

26BSは、これで三機を戦列から失ったことになる。

被害を受けているのは、26BSだけではない。

マクブライト中佐が直率する21BSでも、編隊後方に位置するB24二機が黒煙を引きずっており、14BGも落伍機を出している。

二万七〇〇フィートの高高度を飛ぶことで、ジークを寄せ付けなかったB24群だが、高みから振り下ろされる「ハンマー」に、次々と被撃墜機を出している。

『リリー』全機、最初の一撃を凌げ！」

ローリーは、26BSの残存全機に呼びかけた。

トージョーは、速度性能が高いが火力はさほどでもない。両翼に装備する一二・七ミリ機関砲は、エンジンや燃料タンクに喰らわない限り、B24に致命傷しょうを与える力はない。

下方に離脱したトージョーが、再び高高度に上がって第二撃をかけて来ることもない。

ハンマーブロウ・アタックは、一度さりの攻撃なのだ。

その一度を凌げば、生き延びられる。

「21BS、環礁を越えます！」

パイルが叫んだ。

報告された通り、マクブライト中佐の直率中隊が先陣を切り、環礁の内側に進入している。

環礁の外郭がくからモエン島までは、約五哩。

B24の速力なら、二分足らずで到達できるが――。

「トージョー来ます！」

パイルが、緊張した声を上げた。

新たなトージョーが一〇機前後、21BSの前上方で、次々と機体を翻している。

特有の太い機首を下に向け、B24の頭上から落ちかかる。

先頭のマクブライト機が射弾を撃ち上げ、後続するB24も指揮官機に倣う。

トージョー二機が相次いで火を噴き、急降下から墜落に転じるが、残りは臆おくすることなく突っ込んで来る。

先頭のトージョーの動きに、ローリーは目を見張みはった。

そのトージョーは、両翼だけではなく、機首からも射弾を放ったのだ。

真っ赤な曳痕が、マクブライト機に突き刺さった。

一連射を放ったトージョーが離脱したときには、二番機、三番機が、続けてマクブライト機に一撃を浴びせた。

マクブライト機の右主翼に、火焰かえんが躍おどった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。